アスパラガス (露地) (黒ボク土)

〔土壌肥料〕 | 茎葉でつくられた同化養分は貯蔵根に蓄えられ、翌年の萌芽につかわれ、立茎後の同 化養分は貯蔵と萌芽に使用される。そのため、年間を通した施肥管理が必要となる。特に春芽収量には晩秋の窒素が大きく影響する。肥料吸収はカリが最も多く、次いで窒素、 リン酸の順であり、これらを安定的に効かすためには、有機物の施用や定植前には深耕 が重要である。なお、アスパラガスは多肥と多灌水を好む野菜と言われているが、肥料 については過剰とならないように留意する必要がある。

〔病害虫・雑草防除〕

健全な種苗を用い、罹病株や害虫寄生株は本圃に定植しない。連作すると土壌病害虫が発生するので、過度の連作は避ける。茎葉の支持、適正な整理を行い、過繁茂を避け、 通風を良好に保つ。本圃に一度定植すると、数年以上栽培、収穫される作物であることから、病害虫の被害茎葉の除去は、より適切に行う必要がある。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点にたった投入量管理を行う。	堆肥 2t/10a
化学肥料低減技術	基肥は局所施肥(条施肥など)するとともに、窒素、カリについては追肥型の施肥法をとることを基本とする。 肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせて、養分吸収特性に対応した施肥成分の供給を行う。 有機質肥料による施肥を行う。	成分量で慣行施肥量の20%減 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20~50%
化 学 農 薬 低 減 技 術	機械除草を行う。 BT剤をローテーション散布に位置づける。 (対象:ハスモンヨトウなど) 微生物農薬を利用する。 (対象:アザミウマ類) 被覆資材により雨よけ栽培を行う。 (対象:茎枯病など) 性フェロモン剤により発生予察や誘殺を行う。 (対象:ハスモンヨトウ)	慣行使用回数の 20%減
その他の留意事項	水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保などを図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。 冬期に枯れ上がった地上部をすべて刈り取って圃場外に搬出し、翌年の茎枯病、斑点病を防止する。	

アスパラガス (施設) (黒ボク土)

〔土壌肥料〕 | 茎葉でつくられた同化養分は貯蔵根に蓄えられ、翌年の萌芽につかわれ、立茎後の同 化養分は貯蔵と萌芽に使用される。そのため、年間を通した施肥管理が必要となる。特に春芽収量には晩秋の窒素が大きく影響する。肥料吸収はカリが最も多く、次いで窒素、 リン酸の順であり、これらを安定的に効かすためには、有機物の施用や定植前には深耕 が重要である。なお、アスパラガスは多肥と多灌水を好む野菜と言われているが、肥料 については過剰とならないように留意する必要がある。

〔病害虫・雑草防除〕

健全な種苗を用い、罹病株や害虫寄生株は本圃に定植しない。連作すると土壌病害虫が発生するので、過度の連作は避ける。茎葉の支持、適正な整理を行い、過繁茂を避け、 通風を良好に保つ。本圃に一度定植すると、数年以上栽培、収穫される作物であることから、病害虫の被害茎葉の除去は、より適切に行う必要がある。

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安
有機質資材施用技術	土壌診断に基づいた低成分含量堆肥(稲わら堆肥及び落葉堆肥等で、窒素、カリ含量が1%以下の完熟したもの)の施用を基本とする。 肥料成分含量の高い畜産系堆肥の施用にあたっては長期的な視点に立った投入量管理を行う。	堆肥 2t/10a
化学肥料低減技術	基肥は局所施肥(条施等)するとともに、窒素、カリについて追肥型の施肥法をとることを基本とする。 肥効調節型肥料と速効性肥料とを組み合わせて、養分吸収特性に対応した施肥成分の供給を行う。 有機質肥料による施肥を行う。	成分量で慣行施肥量の20%減 有機質肥料併用の場合には化学肥料低減率20~50%
化 学 農 薬 依	B T 剤をローテーション散布に位置づける。 (対象:ハスモンヨトウなど) 天敵農薬を利用する。 (対象:アザミウマ類など) 微生物農薬を利用する。 (対象:アザミウマ類など) 夏季に太陽熱土壌消毒を行う。 (対象:土壌病害虫、雑草など) 流滴性被覆資材を利用する。 (対象:灰色かび病、斑点病など) 近紫外線除去フィルムを利用する。 (対象:灰色かび病、斑点病、アザミウマ類など) 開口部やサイドを防虫ネットで被覆する。 (対象:アザミウマ類、ハスモンヨウトウなど) 性フェロモン剤による発生予察、誘殺を行う。 (対象:ハスモンヨトウ)	慣行使用回数の20%減
その他の留意事項	水田転作など灰色低地土で栽培する場合には、作土深の確保などを図るとともに、優良有機物資材の施用を基本とし、溶脱防止に留意したきめ細かな施肥法をとる必要がある。 盛土などが行われている圃場では、その客入土壌の改良を行う。 冬期に枯れ上がった地上部をすべて刈り取って圃場外に搬出し、翌年の茎枯病、斑点病を防止する。	